

## 寒冷地での短日処理によるイチゴの夏秋どり

野菜花き部 野菜花き栽培研究室 019-641-9246

### 研究のねらい

夏秋期(7-10月)において、品質の良い国産イチゴの増産が求められている。東北地域の夏季冷涼な気候を利用して、短日処理のみによる低コストな夏秋どり栽培が可能であることは、すでに品種「女峰」で知られている。そこで、最近の主力一季成り性品種の短日処理への適応性を明らかにする。

### 研究の成果

促成栽培用の早生品種「さちのか」および「とちおとめ」に8時間日長の短日処理を行った場合、花芽分化時期は「女峰」とほぼ同等で、通常では処理開始から約30日後に花芽分化が確認できる。一方、露地・半促成栽培用の休眠の深い品種「北の輝」では、これらの早生品種より約10日程度花芽分化が遅れ、短日処理の日数は40~45日程度となる(図1)。

遮光資材を展張し、冷房装置等を伴わない簡易なトンネルの短日処理施設(図2)により、盛岡市で8時間日長(9:00~17:00)の処理を行った場合、外気温との気温差はわずかであり、本施設の短日処理利用時の温度面での支障のないことが確認された(図3)。

### 成果の利活用

短日処理は、5月中・下旬に採苗後3~5週間雨よけハウス内で育苗したのち、6月下旬~7月上旬に開始した。この場合、9月下旬から収穫が始まる。短日下におけるイチゴの花芽分化は温度の影響を強く受ける。地域による温度差や気象の年次変動等により、分化までの処理期間は増減し、例えば、2003年のように気温が低ければ、花芽分化は上記よりも数日早まる。したがって、定植は必ず茎頂の検鏡によって花芽分化を確認した後に進行。

詳細は

<http://tohoku.naro.affrc.go.jp/yasai/SD%20treatment.PDF> をご覧ください。

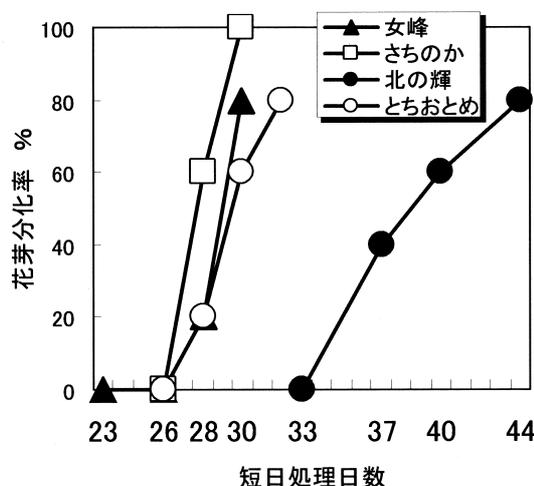


図1 短日処理中の花芽分化率の推移(2002年)



図2 短日処理用トンネル

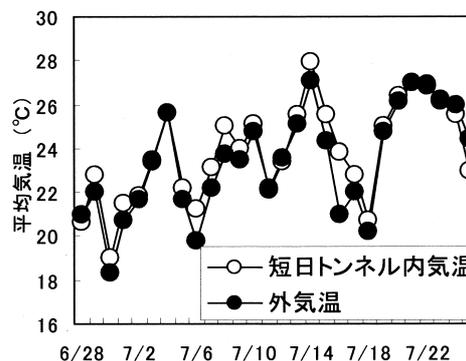


図3 短日処理トンネル内外の日平均気温 (2002年、岩手県盛岡市)